２０１７年度大学コンソーシアム京都インターンシップ・プログラム
プログレスコースプロジェクト報告書

特定非営利活動法人子ども自立の郷
ウォームアップスクールここから

つながり、紡ぐ希望の「ここなつ祭２０１７」in 余呉

佛教大学３回生　大沼祐太
京都女子大学３回生　亀田みなみ

受け入れ先
特定非営利活動法人子ども自立の郷ウォームアップスクールここから

プロジェクト名
つながり、紡ぐ希望の“ここなつ祭”in 余呉

メンバー
大沼祐太、亀田みなみ

１．ここからについて
特定非営利活動法人子ども自立の郷ウォームアップスクールここからは、滋賀県長浜市余呉町上丹生という地域の旧丹生小学校を活用した不登校の子供たちの自立支援をする施設である。実習当時、生徒数１０名と、職員数３名が生活を共にしていた。ここからの一週間の始まりは木曜日で、月曜日までの４泊５日間を生徒と職員が共に寄宿生活をおこなっている。
施設は自然の山々や川に囲まれており、その環境の中で生徒たちは陶芸やカヤックなどの体験や共同生活を通じて、自信を取り戻し社会復帰すること目指している。ここからは、中山間地域である余呉町のコミュニティ形成に役立っている面もあり、毎週土曜日には「Cococafe」というカフェを開催し、生徒たちが地域の方々と積極的な交流ができるような機会が設けられている。

２．プロジェクトの概要
プロジェクトは、今年で７回目に開催になる夏祭り、ここなつ祭のテーマを決めることから始まった。
今回、私たちが考え出したテーマは「心をつなぐ七つの光　ここから彩る僕らの未来」である。一つ一つにコンセプトがありそれは以下のようになっている。

１）心をつなぐとは、ここからという空間の中で様々な人との出会い、そして交流していくということを表している。ここからには、寄宿生や職員のみならず、ボランティアの方や地域の方々も集まり交流するのでこのように表現した。

２）七つの光とは、今年で七回目の開催になる夏祭りであるということと、虹の一色一色の色の違いというものと、ここからに関わる全ての人の一人ひとりに違う個性というものを重ね合わせ表した。

３）僕らの未来とは、余呉という若者が減り続ける地域の未来や、そうした中でのここからの未来の姿、ここからにいる子供たちの将来がここからを中心に彩られてほしいという希望を込め表現した。

この言葉を組み合わせることで最終的に「心をつなぐ七つの光　ここから彩る僕らの未来」というテーマを生み出した。

３．実習について

インターンシップの活動について、大きく３つの期間に分類することができる。実習前と寄宿をはじめ夏祭りまでの期間、そして夏祭り開催後までの期間である。

① 実習期間前（６月１５日から８月１６日）

【夏祭りのテーマ】

６月の後半から７月頭にかけて、先ほど紹介した「心をつなぐ七つの光　ここから彩る僕らの未来」という２０１７年度のここなつ祭のテーマを考えることからスタートした。テーマを決める際、過去の先輩方のテーマを参考にさせていただいたが、なかなか二人の意見をまとめることが難しくテーマ決定まで日にちが長引いてしまった。

【実習に向けた取り組み】

実習期間までに行った取り組みは以下のようになる

・フライヤー（チラシ）の作成
・企画案の作成
・川狩り

テーマが決まった後は地域の方々にここなつ祭開催をお知らせするためのフライヤーの制作を行った。以下が実際に配布したフライヤーになる。

図１　配布用フライヤー

そして、企画案の作成では、ここなつ祭の中でテーマをどのようにしてお祭りの中で表現していくかを考え、まとめるということを行った。

７月２３日には川狩りという昼食会に参加した。本来であれば施設近くの河岸でここなつ祭に協力してくださる地域の方々と顔合わせするはずだったのだが川の増水があったため施設の中で執り行われた。この場を借りてインターン生は自身の紹介を行い、また地域の方々にっとてのここからやここなつ祭に対してどのように思っているのかを尋ねることができる貴重な時間であった。

図２　川狩り風景

② 実習前期（８月１７日～９月４日）

８月１７日からは４泊５日の寄宿生活を開始し、寄宿生たちと交流しながらここなつ祭の準備を行った。

【ステージ作り】

今回のここなつ祭では、ステージ企画を用意したためステージの設置を計画した。ステージはグランドのバックネットに置き、スクリーンと横断幕も合わせ設置することにした。

ステージを作るのは今年が初めてではなく、２年前の先輩が残してくださった図面を参考にし、足りないものの買い足しなどを行った。

スクリーンと横断幕は白い布を用いて制作した。横断幕は毎年使えるものを残したいという考えがあり、白い余白部分には制作に関わったメンバーの落書きがしてある。

図３　ステージ完成図

【光のオブジェ作り】

テーマの「七つの光」を表現するために約３５０本のペットボトルに色水とサイリウムを用いて光のオブジェを制作した。

図４　光のオブジェ

【ここなつ祭当日】
日時：9月3日（日曜日）
場所：ウォームアップスクールここから（旧丹生小学校）
時間：昼の部11時から14時　夜の部17時から19時
天気：晴れ

今年のここなつ祭は数年ぶりに外での開催を執り行うことができた。

○昼の部（11時から14時）
＜来場者記念チェキ＞
ここなつ祭に参加してくださった方にはチェキを撮りここなつ祭をモチーフにした台紙に貼り付け記念品として渡した。

＜つながりビンゴ＞
昼の部では「つながり」をテーマにしたつながりビンゴという企画を行った。水鉄砲射的やヨーヨー釣りなどのゲームや「元気にあいさつしよう」などのお題を書いたビンゴカードを子どもたちに配り、全てのお題をクリアし、シールが集まったら景品がもらえるというものだ。ビンゴカードにシールを貼るという作業を通してゲームの担当をしてくれている寄宿生と子どもたちや保護者が自然と関われるきっかけとなればと思い企画した。

図5　つながりビンゴ（ボール投げ）

図6　つながりビンゴ（水鉄砲射的、ヨーヨー釣り）

○夜の部（17時から19時）
＜来場者記念チェキ＞
　昼の部と同様のため省略

＜余呉の主張＞
　ステージ企画として計画したもの。テーマである「心をつなぐ」を表現する企画。心をつなぐ、例えば人とのかかわりの中で感動したことやうれしく思ったことなどを会場いおられる方々にインタビューをし人とのつながりを感じてもらうことを目的とした。

＜琵琶湖周航の歌合唱＞
　今年で100周年になる琵琶湖周航の歌を会場にいる参加者全員で合唱した。ここでも「心をつなぐ」を表現するためのステージ企画になる。リードボーカルを声楽の勉強をされていた地域おこし協力隊の方にお願いし、歌詞をステージのスクリーンに映し出すなどの工夫を凝らした。また、歌詞カードの配布も行った。

＜光のオブジェ＞
　先ほど紹介したペットボトルで作った光のオブジェを「七つの光」を表現するために会場に展示した。

＜スライドショー＞
　「僕らの未来」というテーマを表現するために、地域の方々から余呉の古いアルバムをお借りしてステージのスクリーンにスライドショーとして流した。写真を見てもらうことで過去を感じてもらい、今、そして未来を感じっとってもらうことを目的とした。また、スライドショーのBGMには寄宿生の一人が作成してくれた曲を使用した。

＜飲食コーナー＞

揚げ物	焼き物	配りもの
串揚げ 揚げたこ焼き ※フライドポテト ※からあげ	やきとり ※フランクフルト ピザ	枝豆 スナック ※綿菓子 豚汁 ※かき氷 おもち ※ドリンク

※は昼の部でも用意したもの

○実習後期（9月7日～9月11日）
　実習後半では、どうしても指示的なやり取りが多かった準備とは違い、寄宿生たちと交流をしながら次年度インターン生への申し送り書類の制作などを行った。

【寄宿生との交流】
　グランドでキャッチボールや室内でテレビゲームやトランプゲームなどをして遊んだり、琵琶湖でのカヤック体験、実習最後の夜にはインターン生お別れ会を開いていただき、職員や寄宿生のみならず、ボランティアや地域の方々も足を運んでくださった。

【申し送り書類の作成】
　今回、私たちが感じたのが過去の先輩方が残してくださった書類の大切さであった。実際、何度も過去の資料を参考にさせていただいた。そのため、私たちは過去には残されていなかった消費電力のリストや、今年のここなつ祭の会場図、あまりの出た資材の個数や保管場所などを細かく記し残してきた。

４．まとめ
　私たちインターンシップ生は、実習期間前に全く意思の疎通ができておらず実習が始まってから険悪な感じになってしまうなどの問題があった。これは私たちがこのプロジェクトに対しての理解や認識の甘さが大きな反省点である。日ごろからコミュニケーションを絶えず取り合い、疑問や不安があればすぐに確認や相談ができるような関係作りが必要であった。
　また、プロジェクトを実行していこうとしていくなかで、見通しの甘さも大きな問題として浮かび上がってきた。備品の必要以上の買い足しなど金銭的見通しの甘さだけでなく、制作に要する時間の見誤りによってスケジュールを大きく狂わせるなどの見通しの甘さがあった。

　最後に、今回この貴重な学びの場を設け、約半年の間ご指導くださった大学コンソーシアム京都事務局の皆様や、コーディネーターの先生方、そしてここからに関わる全ての皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

インターンシップ生
大沼祐太　亀田みなみ